令和7年度　和歌山県農林大学校農学部　学校評価シート

教育目標

高度な専門知識と技術並びに幅広い視野と
豊かな人間性をもった明日の和歌山県の農業を担う人材の育成

中期的目標

教育カリキュラムの充実による優れた経営感覚や実践的技術・知識をもった農業後継者と農業技術者の育成

	直近5年平均	5年後
入学者数	15名	23名
就農率	28%	45%

今年度の重点目標

1　学生の確保
2　教育活動の充実・強化
3　進路支援の強化
4　情報発信の充実

評価基準

【評価区分・5段階】
5：当初目標を十分達成した（101%以上）
4：当初目標をほぼ達成した(81～100%)
3：当初目標を概ね達成した(61～80%)
2：当初目標の半分程度達成した(41～60)
1：当初目標をほとんど達成できなかった(40%以下）

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組 計画	本年度の取組 実績	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
1　学生の確保	○平成以降入学者の定員割れが続いている ○直近5年は年平均15.2名と低迷（受験者数18.2名） 定員40名 ↓ 実績：15.2名 （R3～7平均） 出身高校の属性(R3～R7) 農業39%、　総合20%、 普通35%、　商工業6% ○県外からの入学生は増加 直近5年は毎年県外からの学生が入学 年平均3.4名。 (県内外の属性(R3～R7)) 県内77%、 県外23% ○アグリビジネス学科（H29新設)の入学者も低迷 定員10名 ↓ R7年度1名 (H30：5名、R1:0名、R2:4名、R3:2名、R4:3名、R5:0名、R6:5名)	【令和7年度入学生：20名確保】 園芸学科：15名 アグリビジネス学科：5名 ○高校へのアプローチ ・学校訪問 ・資料送付 ・高校職員の関係会議でPR	○学校紹介と学生募集活動の展開 ・受験者数の確保　23名以上(入学生/受験生＝約9割)	受検者数　16名　うち　入学　15名	3	・非農家出身の受験生は増加傾向で就職に関心が高い ・本校の多彩な就職先や高い就職率を強調 ・2～3年の進路指導時期を重点に県内外の高校に巡回説明を行い、受験者数を確保する	3	・訪問回数は十分確保されているが、伝える情報の質は改善の余地がある。 ・学生を呼び込むキーワードは「スマート」、「AI」などには興味が高いと考える。
			・教育委員会との連携による高校訪問 （事前に県立学校教育課長から県内全高校へ協力依頼文を発出のうえ、集中訪問を実施） ↓ 学校訪問巡回数　4巡 6月、9月、11月、1月 延べ106校（ 県内87校　県外19校） 学校パンフレット、農学部紹介チラシ、ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ案内を持参 園芸学科、ｱｸﾞﾘﾋﾞｼﾞﾈｽ学科それぞれの特徴を巡回説明	学校訪問・巡回数 延べ　91校（県内78校　県外18校） 1巡目　6～7月　41校 2巡目　9～11月　30校 3巡目　2月　25校 計画どおり説明を行った。				
			・募集要項、学校案内等の送付（4月） 募集要項　学校案内 県内　48校　204部　245部 県外　292校　268部　330部 計　472部　575部	計画通り実施				
			・教育関係首長会への出席、農大概要説明　（校長、副校長） 教頭会議　5月13日　校長説明　募集要項　110部を配布 進路指導部長会議　5月17日　教授説明　70部を配布 進路指導研究会等　7月上旬　副校長説明	教頭会議　5月8日　校長説明　110部を配布 進路指導部長会議　5月16日　教授説明　70部配布 進路指導研究会　7月4日　副校長説明　70部配布				
			《評価》 ・学校紹介や学生募集活動を行ったが、令和8年度入学生17名（園芸学科　14名　アグリビジネス学科　3名）にとどまった。 ・県外の高校はオープンキャンパスへの参加があった近隣府県の高校を中心に訪問を行った。					
		○オープンキャンパス　4回 ・夏は高校3年生、 ・春は1、2年生をターゲット ・参加人数制限をなしに	○チラシ配布やHPなどにより事前告知を強化 ・7、9に3回開催　(7/6（日）、7/27（日）、9/7（日）)	計画どおり実施	4	引き続き、ホームページやSNS（インスタグラム）、学校訪問等でオープンキャンパスの参加を周知	4	・オープンキャンパスで受験者数の増加を目指すならば参加人数を増やす取り組み等も必要と考えます。
			・3月に1回実施	令和8年3月15日（日）に実施予定				
			・参加者に「入試想定問題」を配布するとともに、職員からスマート農業、GAP演習の取組みを、学生から農大生活等を紹介 ・卒業生から農林大に入学してよかったことや役に立ったことを紹介 ・オンラインによる申込フォームによる利用者の利便性の向上(kintoneによる参加者とりまとめ)	計画どおり実施				
			《評価》 夏（7、9月）のオープンキャンパスでは参加者30名（35名申し込み）のうち、19名（約6割）が受験、またR6春参加者2名が受験。 オンラインによる申し込みにしたことで参加者が増加					
		○農業系高校との連携強化と出前授業の実施	○県内農業系4高校との連携強化 ・「高大連携プロジェクト」（R3新規事業）の推進 農業系4高校(紀北農芸、有田中央、南部、熊野）と農林大学校が専門的な授業等で連携することにより、5年一貫の教育システムを構築する事業 ○ 令和7年度入学生受入体制の構築 ○ 令和8、9年度入学生のプロジェクト研究テーマの検討	・令和7年度第1期生として4名が入学 （有田中央　2名、南部　1名、熊野　1名） 2月17日　農業系4校農場代表者会議を本校で開催。 7年度入学特待生4名が自身のプロジェクト進捗状況を説明。	4	・各農業系高校と連携を一層強化 （担当職員同士の交流により、授業、実習の指導レベル確認とプロジェク学習の修正を進める） ・令和7年度受け入れ学生への指導充実と令和8年度に向けた準備	4	・農業系4校と農林大学校との交流を引き続きお願いします。 ・一貫プロジェクトの発展と拡充を期待します。
			・高校からの依頼に基づき、リモート発表を開催 プロジェクト研究を発表紹介(本校発表会　12/13) 卒業論文発表会（2/13）	本年は実施せず				
			○出前授業の実施 ・本校職員が高校からの依頼内容に基づき高校での授業を実施 「和歌山県の農業」 「農業の魅力と農林大学校」 「就農支援制度」 等	2校で実施 南部高校　9月16日　24名 熊野高校　1月28日　150名				
			《評価》 「高大連携プロジェクト」1期生4名を受け入れることができた。					

令和7年度　和歌山県農林大学校農学部　学校評価シート

教育目標

高度な専門知識と技術並びに幅広い視野と
豊かな人間性をもった明日の和歌山県の農業を担う人材の育成

中期的目標

教育カリキュラムの充実による優れた経営感覚や実践的技術・知識をもった農業後継者と農業技術者の育成

	直近5年平均	5年後
入学者数	15名	23名
就農率	28%	45%

今年度の重点目標

1　学生の確保
2　教育活動の充実・強化
3　進路支援の強化
4　情報発信の充実

評価基準

【評価区分・5段階】
5：当初目標を十分達成した（101%以上）
4：当初目標をほぼ達成した(81～100%)
3：当初目標を概ね達成した(61～80%)
2：当初目標の半分程度達成した(41～60)
1：当初目標をほとんど達成できなかった(40%以下）

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組 計画	本年度の取組 実績	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
		○アグリビジネス学科のPR	○農学部パンフレット、アグリビジネス学科PR資料配布説明 アグリビジネス学科生の確保のため、カリキュラムをわかりやすく説明し、農業経営が学べることを知ってもらう	・県内外の学校訪問等で各学科の違いや強みを進路指導の教諭に説明 【再褐】 教頭会議　5月8日　校長説明　募集要項　110部を配布 進路指導部長会議　5月16日　教授説明　70部を配布 進路指導研究会等　7月4日　副校長説明　70部配布	3	・引き続き学校訪問等でアグリビジネス学科の特徴を丁寧に説明 ・プロジェクト学習（農大ブランド商品開発）を通じた取組みを紹介	3	・農林大ブランド商品開発と周知方法、販売方法（ふるさと返礼品）の工夫 ・県外での販売体験など必要ではないか。
			《評価》 ・R8年度アグリビジネス学科入学生3名（R7:1名） ・オープンキャンパスで本校農産物の加工体験やゲームによる農業経営者体験を提供					
2　教育活動の充実強化	○スマート農業の振興など農業を取り巻く情勢は刻々と変化 ○一方、本校学生の属性も多様化 ・学生の属性 (R3～R7) 専業農家　20% 兼業農家　17% 非農家　63% (H28～R2) 専業農家　18% 兼業農家　30% 非農家　52% ・出身高校 (R3～R7) 農業39%、　総合20%、 普通35%、　商工業6% ○学生間に基礎学力の開きがある ○資格取得率 （R2 ～R6実績） ・大型特殊自動車（農耕用）:100% ・園芸技術:R7より廃止 ・農業技術検定2級:20% ・農業簿記3級:42% ・危険物乙四:14% ・毒劇物:1% ・狩猟免許(わな猟):85%	○時代の流れに即した授業の実践 ・授業期間の確保	【授業期間の組換え】 ○スマート農業機械演習《1年 前期:12時限、後期:8時間》 スマート農機の操作技術等を早期に習得させるため、演習を前期に集中して実施する。 →専攻実習で農薬散布ドローン、リモコン草刈機、スピードスプレヤー等の活用を高めることで、実践力を強化する	・1年生を3班に分けて、4月、5月に演習を実施、12月には、農薬散布ドローンのデモ運航や小型ドローンの操縦体験を行った。	3	・スマート農業機械演習は、引き続き、1年生時で演習を実施	3	・スマート農業とGAPは農業だけでなく、将来の社会で必要な知識と考える。 ・コーチング等も取り入れていただきたい。 ・スマート農機演習は農林大の一つの強味と考えるので、もっとPRしてはどうか。
			○GAP（農業生産工程管理）の実践教育《2年 48時限》 国庫事業を活用し、令和2年度「カキ」、3年度「トマト」のグローバルGAPの認証継続 GAP演習を通じて、認証取得に向けた実践教育を実施する	計画通り実施		・引き続き、1年次の科目「GAP」で基礎を学び、2年次の「GAP演習」を通じて認証取得に向けた実践教育を実施		
			○特別講義 農大学生会社の店舗運営、組織運営等に学習領域を広げた授業を実施	・2年生に対し、起業の実践的な学習を実施 株式会社設立手続きや財務・労務管理、容器デザイン等、外部講師による演習・講義を実施 ・学生全員を対象に和歌山大学岸上先生と県庁職員による講義と和大学生とのワークショップを実施		・学生会社については、運営にかかる知識の習得に加え、会社運営の実務を学生が適切に実施できるよう指導 ・特別講義については、県内若手や先進農家等による講義やワークショップ等を開催、未来の農業を考える時間とする		
			○試験研究機関との連携による卒業論文指導 R6年度新入生から実施	・「イチゴの育種」をテーマに、農業試験場と連携。		・イチゴの品種育成に向け、担当学生への卒論指導とともに引き継ぐ学生への指導も実施		
			《評価》 ・スマート農業機械の構造と取扱い等の習得、先進事例の学習 ・カキとトマトのグローバルGAP認証を継続取得（1月13日付け） ・農業試験場の協力のもと、「まりひめ」を育種親としたイチゴの育種をスタートした ・講義による受け身の授業でなく農業について自発的に考える時間を持つことができた					
		○資格取得の拡充と資格取得率向上を目指した取組 ・資格取得率 大型特殊自動車（農耕用）:100% 園芸技術(2年):80% 農業技術検定2級(2年):30% 農業簿記検定3級(2年):70% 危険物(1年):40% 毒劇物(1年):30% 狩猟免許【わな猟】(2年):90%	○ドローンのオペレーター講習による資格取得《R6より》 受講者4名予定	1年生4名が受講予定。3月18～20日にDアカデミー近畿和歌山校で実施予定	3	・ドローンオペレーター講習による資格取得の受講者を5名予定	3	・ドローンオペレーター資格は高額なため、就農・就職前に経験及び取得できることは大きな財産と考えるので継続を。
			○日本農業技術検定2級 資格試験直前の集中講義を編成「資格取得対策」を実施 模擬試験の実施	計画どおり実施		・資格試験対策として集中的に過去問題を中心に講座を実施		
			○農業簿記検定 模擬試験の実施	計画どおり実施		・理解度の高い学生は早い段階で検定試験を受験		
			○危険物・毒劇物 外部講師を招聘（R1～） 不合格者に対し再チャレンジへ誘導（R2～） 職員による補習授業の実施（R2～） 過去問題を徹底解説し、個別指導の強化で対応	計画どおり実施		・その他の資格試験は、学生の資格取得の状況に応じて取得対策を実施		
			《評価》 ・R7資格取得率（R6） 大型特殊自動車（農耕用）:100%（100%）、農業技術検定2級:62%（20%）、農業簿記3級:42%（32%）、危険物:30%（14%）、毒劇物:5%（0%）、狩猟免許（わな猟）:100%（78%） ・農業技術検定2級、農業簿記3級、危険物、毒劇物、狩猟免許は昨年度より合格率が上がった。					

令和7年度　和歌山県農林大学校農学部　学校評価シート

教育目標

高度な専門知識と技術並びに幅広い視野と
豊かな人間性をもった明日の和歌山県の農業を担う人材の育成

中期的目標

教育カリキュラムの充実による優れた経営感覚や実践的技術・知識をもった農業後継者と農業技術者の育成

	直近5年平均	5年後
入学者数	15名	23名
就農率	28%	45%

今年度の重点目標

1　学生の確保
2　教育活動の充実・強化
3　進路支援の強化
4　情報発信の充実

評価基準

【評価区分・5段階】
5：当初目標を十分達成した（101％以上）
4：当初目標をほぼ達成した(81～100%)
3：当初目標を概ね達成した(61～80%)
2：当初目標の半分程度達成した(41～60)
1：当初目標をほとんど達成できなかった(40%以下）

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組 計画	本年度の取組 実績	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
		○魅力ある教育の実践（その1） ・スマート農業関連技術の導入	○自動環境制御を活用した「ミニトマト」増収栽培技術の習得をプロジェクト学習で、「ガーベラ」の高品質生産技術の習得を専攻実習を通じて実践 （R3～）	・自動環境制御を活用したミニトマトの増収やガーベラの高品質生産の知識や技術をプロジェクト学習や専攻実習を通じて習得させた。 また、自動環境制御ハウスでミニトマトの品種比較を卒業論文として取り組んだ。	3	・環境測定データを蓄積し、予測精度を上げスマート農業関連技術の導入効果について学習させる。	3	・ぜひ、農業高校4校にも紹介していただき、スマート農業について学べる学校であることを周知してください。
			○プロジェクト学習として、蓄積された施設内環境の測定データを活用し、収穫予想を行い、予測を基にした栽培管理計画や出荷計画を行う	・施設内環境の測定データを活用し、ミニトマトの収穫及び農薬散布などの栽培管理に活用した。				
			《評価》 ・プロジェクト学習や専攻実習、卒業論文を通して、ミニトマト、ガーベラの環境制御を活用した栽培技術や知識を習得 ・ミニトマトの収穫予測の実証を行うことで環境制御による効果について学習できた					
		○魅力ある教育の実践（その2） ・GAPの取組を加速化	○GAP演習の授業導入 農大職員によるVer.6審査に対応した講義・演習(合計12回）によりグローバルGAPの認証取得に必要な知識と技術の習得を行う。	・計画通りに実施	3	・職員の知識と指導スキルを向上により、学生が主体となったグローバルGAP継続認証の取得を図る ・販売実習における設定価格の再検討 ・ネット販売時の学生による販売価格の設定 ・輸出方法の検討	3	・カキの輸出販売が実施できることを期待しています。 ・実践経験は何よりも学生本人の強みになると考えるので、継続・拡充してはどうか。
			○グローバルGAP認証継続のための職員指導体制の強化 ・農業生産工程管理チーム体制の整備による指導強化 ↓ ・学生がGAP実践の知識や技術を容易に習得	・職員7名によって12回の講義、演習を実施することで、GlobalGAPVer.6内容の理解と指導スキルを向上 ・審査終了後も次年度の認証継続取得に向けて各コース長を中心として、学生への指導を継続 ・GAP授業の理解度テスト結果は70点であるとともに、アンケート調査においても必要性や取り組み内容について概ね理解できている（資料8参照）				
			○果樹・野菜・花き全コースでGAP農業の取組みを強化 ・グローバルGAP.(カキ、トマト)【継続】 ・MPS－ABC認証取得(花き)【継続】	・グローバルGAP.(カキ、トマト）R8年1月14日に取得（カキ継続6年目、トマト継続5年目） ・MPS-ABC認証取得　R8年取得見込み（継続4年目）				
			○GAP認証品の販路拡大 ・カキの販売実習（店舗でのテスト販売） ・カキの輸出販売	・カキの販売実習（やっちょん広場）→11月1日、2日 学生（2年生）が主体となって価格設定を実施 紀の川柿　165.0kg、96,250円（275袋、0.6kg/350円/袋） 紀の川柿　51.0kg、112,200円（17箱、3.0kg/2,200円/箱） 平核無　165.0kg、96,250円（275袋、0.6kg/350円/袋） ・カキのネット販売（JAタウン わかやまマルシェ）→9月20日～10月31日 紀の川柿　24.0kg、39,200円（8箱、3.0kg/4,900円（内手数料2,400円）/　箱） ・輸出実績なし				
			《評価》 ・プロジェクト学習や専攻実習、卒業論文を通して、ミニトマト、ガーベラの環境制御を活用した栽培技術や知識を習得 ・ミニトマトの収穫予測の実証を行うことで環境制御による効果について学習できた					
		○魅力ある教育の実践（その3） ・模擬会社の学生運営	○「特別講義」で店舗運営や組織運営についての知識を習得	1年生15名が特別講義で和農市の店舗運営や模擬会社の会社運営について学習した	3	模擬会社の収益向上に繋がる利益の使途を社員が検討し、実施	3	・起業というよりは販売と利益に絞った方が良いと思います。 ・実践経験は何よりも学生本人の強みになると考えるので、継続・拡充してはどうか。
			○模擬会社「わかやま農大学生会社」の運営を、学生が中心となり生産から仕入れ、販売までの運営を自ら行う。 店舗運営を通じて、会社経営の方法や納税の必要性などを学習。	・模擬会社「わかやま農大学生会社」定時総会を開催　10/10 当期純利益213千円（第3期） ・出張和農市に社員8名が店舗運営 11/15・16　大収穫祭in九度山				
			《評価》 特別講義による基礎知識の習得により店舗運営や組織運営に取り組む意識の醸成を促すことができた 模擬会社の社員としてイベントへ出向き、現場で接客や販売の技術を磨くことで実際の店舗運営を学ぶことができた					

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組 計画	本年度の取組 実績	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
3 進路支援の強化	○非農家出身の学生が増え就職に関する指導や就職先の開拓などきめ細やかな対応が必要 加えて学生の多様化により卒業後の進路や学校生活に不安を感じる者が現れる傾向がある。 ○就職試験の時期が早まっていることから、学生の就職活動は1年生後半には準備を始める必要がある。 ○1年生における就業意識は未だ低く、早期から積極的に活動する学生は一部である。 ○卒業時の進路確定率 93%（R2～R6）	○将来設計能力の養成 ・授業科目の充実 ・インターンシップ研修で実践	○進路支援強化に向けた授業の実施 ・キャリアデザイン授業(1年生) 学生が主体的に、人生と職業、キャリアプランを思索するため専門外部講師と職員連携による授業を実施 ・就農希望の学生に対する助言として就農した先輩の体験談の講義を実施	・1年生を対象に進路選択の動機づけとして、就職支援に関する講義を12月まで5回実施 9/11 自己分析 10/9 就活に向けたスーツの着こなし（洋服の青山） 10/21 履歴書作成のポイント 11/26 就活について（HW橋本） 12/8 ビジネスマナー、面接試験対策（HW橋本） ・SNS等情報リテラシー教育、消費者教育の講義を実施 ・1/28 広川町で自家就農した卒業生の講義を実施	3	引き続き実施	3	・新規就農希望者が増えるような取組みを実施してください。 ・コミュニケーションスキル習得に向けた講義があれば更に良いと思います。 ・就職させることは重要であるが、加えて農業系への就職を増やすことが必要である。
			《評価》 ・通年の講義を通じ、希望する就職先への意識の醸成に繋がった。 ・ハローワークとの連携することで専門的な情報を提供でき、就職活動のスキルアップが期待できる					
		○ハローワークとの連携強化 ○個別面談による進路指導 ○求職情報の常時提供 ○学校と専門カウンセラー、保護者3者による伴走型支援の実施	○ハローワーク（HW）からの講師派遣 ・求人票から見る就労条件のポイント ・就職面談に有利なエントリーシートの作成 ・HW職員による模擬面接の実施 ○個別面談の実施(進路指導職員、担任との2者面談) ・保護者との連携を密に学生の学力向上と進路意識の醸成を双方から指導支援する 【1年生】5～6月 進路状況調査・二者面談 9月 三者面談 1月 HW講師による模擬面接 ・新規参入希望生へは「新規就農受入協議会」との連携を密に図り、県内の就農定着を支援する ・5月にアンケート調査をおこない、悩みがちの学生には、保護者とカウンセラーと連携しながら、早期サポートをおこなう 【2年生】4月：就職活動状況聞き取り 7月：非内定者への就職支援 随時：進路指導、職員による模擬面接	【再掲】 ・ハローワーク橋本から講師派遣によりキャリアデザインの講義のなかで実施 ・厚生労働省の講師派遣によるガイダンス事業を実施 12月22日 計画どおり実施 ・新規参入希望者がないため未実施 ・5月に行った面談では悩みを抱えた学生は見受けられなかったことからアンケートは実施せず、学生から相談があれば対応できるよう声掛けを行った。 ・就活の状況を学生から随時聴取 ・エントリーした学生への面接指導を随時実施 ・応募書類等のチェックを随時実施	3	引き続き、希望の就職先を早期に決定できるよう幅広く求人情報の収集を行っていく。	4	
			《評価》 ・2年生12名全員が進路を決定した。 ・会社説明会のとりまとめやマッチングの場の提供など学生の就活支援につながった。					
		○就職ガイダンスの開催 対象：1年生 時期：3月 ○ガイダンスを通じた早期就職活動の実施	○本校1年生を対象に、紀北農芸高校との協同開催として企画 JA、農業法人、農業関連企業等を招請し、学生の進路決定の一助とする ○ガイダンスを機に、学生自らが企業担当者へ直接コンタクトをとり、自己PRをおこなうことで、就職活動の優位性を高める	・3月13日に開催予定（参加企業 13社） 農林大学校学生15名、紀北農芸高校生徒48名参加予定 ・希望の就職先を決定できるよう採用実績や特色など企業情報を提供	3	引き続き実施	3	・引き続き実施をお願いします。
			《評価》 ・企業の人事担当者から直接説明を聞くことで早期の就職活動を支援する。					
4 情報発信の充実	○農林大学校が一般に十分認識されていない	○ホームページ・SNSによる農林大学校 の魅力発信	○ブログ以外のツールによる情報を発信と閲覧状況の分析 ・県ホームページ更新30回 ・Twitterによる情報発信 30回 ・Instagramによる情報発信 30回	・県ホームページ更新30回（入試、和農市、オープンキャンパス等） ・Twitterによる情報発信 0回 ・Instagramによる情報発信 46回（2月26日現在）	3	引き続き実施	3	・見る側のニーズの把握、ニーズに合った情報の発信が必要。 ・SNSは絶対継続実施しましょう。
			《評価》 ・インスタグラムのリール動画発信では、1投稿につき閲覧回数が500~1,000回のアクセスが得られ、本校の魅力を現実的かつ効果的に情報発信できた。 ・フォロワー数も323人（R7.3）とR6末の177から約2倍増加し、本校への関心が高まっているとも思われる。					
		○マスメディア等を通じた情報発信	○プレスリリース回数 12回 ○広報誌 10回	・プレスリリース回数 9回 （学生・研修生募集、入試、オープンキャンパス等） ・広報誌 5回（JAわかやま:1、市町:2、農業士会:2）	3	引き続き実施	3	
			《評価》 ・マスメディアを通じて農林大学校の取り組みを情報発信					
		○地域における効果的な情報発信 関係機関（市町、JAなど）や 地元民間企業（JR、スーパー等） を通じた和農林大情報の発信	○市町(経営支援課協力)、JA等関係機関に対して広報誌やホームページへの記事掲載、ポスター掲示を要請 26カ所（市町18、JAわかやま（JAビル、8地域本部）） ○民間企業へのポスター掲示を要請 50カ所	39か所（市町村延べ30、JAわかやま延べ9） ・求人等で訪問した企業や3月13日合同就職ガイダンスにて農業関連企業16社に掲示要請	3	引き続き実施	3	
			《評価》 ・市町やJA等関係機関に対し、広報誌やホームページへ記事掲載を要請。情報発信を継続して実施。					